

General Education



Series

奥村剋三・川上 勉・久津木俊樹 著
辻 善夫・永原 誠・山本岩夫

ヨーロッパ 現代文学を読む

文学入門



有斐閣双書Gシリーズ

ヨーロッパ現代文学を読む

奥村 剋三
川上 勉
久津木俊樹 著
辻 善夫
永原 誠
山本 岩夫



有斐閣双書 G シリーズ

ヨーロッパ現代文学を読む〈有斐閣双書 G シリーズ〉

昭和 60 年 11 月 30 日 初版第 1 刷発行

定価 1,500 円



著者	おく かわ 川久 つじ 辻永 やま 山	むら かみ 村上 つ 津	き 木	かつ 剋 とし 俊 よし 善 いわ 岩	ぞう つとむ 三勉 き 樹 お 夫 まこと 誠 お 夫
----	---------------------------------------	--------------------------	--------	--	---

発行者 江 草 忠 敬

発行所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 東京 (264) 1311 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷 共同印刷工業・製本 昭栄堂製本印刷
© 1985, 奥村剋三・川上勉・久津木俊樹・辻善夫・永原誠・山本岩夫.
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替いたします。

ISBN 4-641-05825-3

はしき

●なぜ小説か

「なぜ小説を読むのだろうか」とか「小説を読むとはいかなる行為であろうか」という疑問をもったことがないだろうか。このような問いを発したときから、われわれは間違いなく「現代小説の世界」に一歩足を踏みこんでいるのである。なぜなら、読者がなぜ小説を読むのかという問いを発するのと同じように、現代作家もまたなぜ小説を書くのかという問題をかかえているからである。

そもそも小説とは、読者を楽しませるためのものであった。何げなく手にした一冊の小説がおもしろくてたまらず、つい時間のたつのも忘れて読んでしまったという思いを読者に与えることができればそれで十分であった。ところがある時期から「なぜ？」という疑問がわいてきた。いったいなぜ小説を書くのか、というわけである。本書は、現代小説がかかえているこのような問題について、読者とともに「読む」ことをねらいとしている。

● 両大戦間という時期

ところで、作家がたえず「なぜ？」と疑問を発しつつ作品を書くようになったのは、おおまかにいって第一次大戦前後の時期であつたといふことができる。この時期から、いろいろな意味で一九世紀的な小説とは、扱われるテーマも書き方も違った、いわゆる「現代小説」とも呼ぶべき新しい小説が書き始められるのである。

両大戦間は、世界の各国が激動の渦の中で揺れ動いた、不安定な時期であつた。とりわけヨーロッパの諸国においては、第一次大戦のもたらした物質的、精神的戦禍は想像を絶するものがあつた。近代兵器の使用による甚大な人身被害は、戦争というものについての概念を一変させるほど深刻なものであつたし、ヨーロッパ文明の破壊は、「西欧の没落」という精神的打撃を人々に与えることになつた。同じ時期にソビエトでは一〇月革命が起り、ヨーロッパ大陸の一角に社会主義国が誕生した。この新しい国家の光と影は、以後さまざまな形でヨーロッパの資本主義諸国に影響を与えることになる。そして、ヨーロッパは第一次大戦の教訓を生かすことができず、やがてヒトラーの跳梁を許し、第二次大戦に突入してしまつた。

このような歴史や社会の動向は、直接的、間接的に文学に影響せずにはおかない。本書で取りあげた小説作品は、このような時代的背景をいろいろな形で反映しながら成立している。小説というもの

が、その基本として、人間をとりまく現実とその現実の中で生きる人間の姿を描くものである以上、その時代をぬきにしては成立しえないのである。本書が両大戦間の小説作品を取り扱っているのは、以上のような理由にもとづいている。

● ヨーロッパ現代小説の特徴

第一次大戦をさかいとして、ヨーロッパ社会は著しく共時性を帯びてきたのであったが、第一次大戦前後に新しい小説が書き始められるという傾向は期せずしてヨーロッパの各国にほぼ共通して見られる現象であった。おそらくそれは、小説というものが近代市民社会の成立・発展と密接に関連して、発生し変貌してきた文学形式であるということと無関係ではないだろう。近代における小説の発生はヨーロッパ社会で起り、そして一九世紀にはその興隆期を迎えたのであるが、本書では、序章において、一九世紀までの小説とはどのようなものであったかを、とりわけ「現代小説」との違いという点から概説した。いわば、「現代小説」がいかなる意味において変貌しているのかを理解するための導入部でもある。第一章以下の各章では、それぞれ三つの小説作品を具体的に取りあげながら、「現代小説」の特徴的な傾向を探ることをめざしている。いうまでもなく、それぞれの国にはその国特有の歴史や伝統があるのだが、しかしそれを超えたところに共通の特徴が見られるという点に注目したい

と思う。

● 取りあげた作家と作品

現代は活字ばなれの時代だといわれる。とりわけ翻訳文学は若者たちの関心をひくことが少ないようである。これにはいろいろな原因があるだろうが、なんといってもこれだけ出版物が氾濫し、興味本位の週刊誌や漫画本が目の前につきつけられては、とても外国文学にまで関心が及ばないのも事実であろう。小説を読む楽しみや小説の面白さを味わう機会が与えられないままに過ぎてしまっているのではないだろうか。小説を読むきっかけが与えられ、小説の読み方、味わい方のヒントが与えられれば、もっと活字への興味が湧いてくるのではないか、いや湧くに違いないと考えて、本書を執筆した。この中で取りあげた小説作品は、それぞれイギリス、ドイツ、フランス、ソビエト、アメリカの各国を代表する作品であり、すでに現代文学の古典として広く世界各国で読まれてきたものばかりであるが、同時に、読者の便宜を考慮して、現在文庫本その他で入手しやすいものに限定して選択した。したがって、本来ならば当然触れるべき作品でも取りあげていないものがたくさんある。本書がひとつの契機となつて、ここで取りあげることができなかった世界文学の多くの名作を読みすすむことになればこれ以上の喜びはない。

本書はもととアメリカ文学を含まないままに構想されたのであるが、さいわい永原誠、山本岩夫両氏のご協力が得られ、内容を充実することができた。両氏に厚くお礼申しあげたい。また、有斐閣の平川幸雄、秋山講二郎さんにはたいへんお世話になった。とりわけ秋山さんには、年表の編集をはじめ面倒な作業を担当していただいたことに謝意を表したい。

この本の執筆のきっかけは、『一九三〇年代世界の文学』のとき以来お世話になった、いまは亡き土肥武氏のおすすめによるものであった。あの温厚な顔に笑みを浮べて「やっとできましたね」と言われそうであるが、本書を故土肥武氏に捧げたいと思う。

一九八五年六月

著 者 一 同

目次

序章	ヨーロッパ近代小説の成立と展開	1
1	近代小説の成立とその特徴	3
2	ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』 ——近代小説の成立——	17
3	ゲーテ『若きヴェルターの悩み』 ——ある自己実現の挫折——	25
4	スタンダール『赤と黒』 ——ジュリアン・ソレルと近代市民社会——	35
5	ドストエフスキ『罪と罰』 ——観念の冒険を描く——	45
第1章	新時代の青春群像	57

1	ジェイムズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』	61
2	マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』	75
3	ニコライ・オストロフスキイ『鋼鉄はいかに鍛えられたか』	89
第2章 西欧文明への批判		
1	D・H・ロレンス『恋する女たち』	107
2	トーマス・マン『魔の山』	119
3	スタインベック『怒りのぶどう』	133
第3章 人間存在の探求		
1	カフカ『審判』	153
2	バージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』	169
3	アルベール・カミュ『異邦人』	183
第4章 歴史を生きる人間		
1	ミハイル・ショーロホフ『静かなドン』	203
2	アンドレ・マルロー『人間の条件』	217
3	アーネスト・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』	231

第5章 文学は現代に問いかける

1 フォークナー『八月の光』……………247

2 サルトル『嘔吐』……………263

3 アンナ・ゼーガース『第七の十字架』……………275

ヨーロッパ現代文学年表……………289

序 章 ヨーロッパ近代小説の成立と展開



グーテンベルク（1398?～1468）の印刷術
金属活字による印刷術の発明が、「書物を自分の
手に」という市民階級の夢をかなえることになる。

近代小説の成立とその特徴

● 文学作品の独自性と普遍性

文学は言葉の芸術である。

芸術の根底には人間の感動がある。あることを体験し、それが感動的なものであると、その感動をなんとか言葉に表わし、他人にも伝えたいという衝動に駆られる。それを言葉にしても「うそ」になると知りながら、表現せざるをえない。まさに言葉にならないものが言葉となって表現されたとき、そこに言葉の芸術たる文学の誕生がある。

芸術には形がある。この感動にはこの言葉でしか表わしようがないという意味での洗練された形がある。しかもその感動はその人間にとって独自の感動であり、その表現も他にはない独自の表現である。だから芸術作品は、個人的な人間の感動のきわめて個性的な表白だといえるだろう。しかし、その芸術作品は、それに接した他の人間にも感動を与える。まるで自分もそのことを体験したかのように感じ、その感動は心のどこかに定着する。おそらく現実の社会においては体験しようにもできないことを体験し、一個の人間のかぎられた生涯においてはとくい知り得なかったような、人間のもつさまざまな可能性や豊かな想像の世界を、文学作品の中に見いだすことができるだろう。

文学作品はそれぞれが個性的なものでありながら、人間の具体的な感動を根底にもっていて、かつ、人間にとっての真実を含んでいるがゆえに、読者にもその感動が伝わるという普遍性をもっている。

いや、個性的であるからこそ、普遍性をもつのだということが出来る。どの時代、どの社会においても「文学一般」というような作品が生まれるわけではない。それぞれの時代、それぞれの社会において最も特徴的ともいえる作品が、いまなおその生き生きとした生命力をもって、われわれに感動を与えるのである。

だから、いかなる天才といわれる詩人の手になる作品でも、その時代の、その社会の産物であることにはかわりはない。詩人をとりまいているその時代、その社会から遊離したところに人間の感動と人間の真実は存在しないからである。

● 小説と時代

詩、劇、物語という文学の三つのジャンルの中でも、とくに物語の分野は、その自由で多様な形式のゆえに、時代や社会との結び付きが緊密であるといえる。たとえば、小説は近代社会の成立とともに誕生し、その発展も近代資本主義の発展と軌を一にしているようにみえる。だから、小説作品を、その時代や社会との関連なしにとらえることはできない。逆にいえば、その時代を知るためには、小説ほどいい教科書はないとさえいわれている。しかし、小説の魅力はそれにとどまるものではない。たしかに、芸術や文学の傑作を生み出したのはそれぞれの時代の社会ではあるが、その時代背景、

つまり経済的、社会的基盤、あるいは文化的諸条件が変貌してしまった現代においても、芸術や文学の傑作はその輝きをもちつづけている。ホメロスやダンテにさかのぼるまでもない。近代小説の主人公、ロビンソン・クルーソー、ヴェルター、ジュリアン・ソレル、ラスコーリニコフたちが生きていたのは、すでに一二〇年から二七〇年も前のことである。その歴史的な基盤はもはやない。それにもかかわらず、われわれがその小説のページを開きさえすれば、それはいまなお人間の想像力に語りかけ、主人公はその姿を現わし、感動をわれわれによびおこす。

時代の子でありつつ、その時代を超越するというこの小説の秘密はどこにあるのか。傑作といわれる多くの作品は、作者が自分の生きている時代の現実を凝視し、その時代の真実を把握することによって、その時代全体がのりこえんとする「人間の渴望」を表現しているといえないだろうか。その時代、その社会に固有の「人間の渴望」を全面的にとらえることはむずかしい。だが、現実の生活に根を下ろした感動を基盤にもつ文学は、この「人間の渴望」という真実を、生きた形で表現することができる。それが、偉大な英雄の詩であれ、平凡な一個人の挫折の物語であれ、これらの作品は、その時代に生きた人間の息吹と感動をもっていて、かつ、時代の真実を体現しているがゆえに、時代をこえた生命力をもってわれわれに迫ってくるのではないだろうか。